



歴史の一こまになった男

松本 侑壬子・ジャーナリスト

今秋に行われる米大統領選挙で、民主党の候補者選びは前代未聞の「女性対黒人」の争いとなっている。もし、春現在優勢が伝えられるバラク・オバマ氏がヒラリー・クリントン氏を破れば、米国初の黒人（アフリカ系アメリカ人）大統領が誕生する（その逆なら当然、ヒラリーさんは、米国史上初の女性大統領になる）。

だが、時代を切り拓いた黒人大統領誕生と言えば、多く的人是はず、南アフリカのネルソン・マンデラ前大統領の名前を思い起こすのではなからうか。厳しい人種隔離政策（アパルトヘイト）に抗して27年間を獄中で生き抜き、1994年に南ア初の全人種参加選挙で初めての黒人大統領（～99年）に選ばれた人物である。

この映画は、題名の示すとおり、その長い囚われの期間の大半を看守として身近に接しながら伴走したある白人軍人の実話である。獄中のマンデラ氏に接するうちに、その人柄に惹かれ、信頼関係を築き、次第に人種を超えた人権・平和思想に共鳴していく姿を、力強い人間ドラマとして描く。

1968年、下級軍人グレゴリー（ジョセフ・ファインズ）は妻グローリア（ダイアン・クルーガー）と幼い2人の子どもと共に国内随一の刑務所として名高いロベン島に赴任する。着任早々、最重要収監者で反政府運動の首謀者マンデラ担当の看守に抜擢されたのは、グレゴリーがマンデラの出身地近くの生まれで現地語コーサ語ができ

たからだった。つまりは囚人のスパイ役である。

これで出世の道が開ける！ グレゴリーは妻と共に張り切る。当時の南アでは黒人は人種的に白人に劣るとされ、アパルトヘイト政策により黒人には投票権がなく、住居、教育、就職などで差別されていた。グレゴリーも妻もそれが当然と信じていた。官舎から自転車で刑務所に通勤する夫に一家の運命がかかっている。職場の上司の妻との付き合いにも気を遣うグローリア。まるでサラリーマン社会の縮図のようだ。

グレゴリーは、マンデラ夫人が面会に刑務所を訪れた日をきっかけに、マンデラ氏とコーサ語を通して心を通わせ始める。マンデラから「自由憲章」に明記した、人種を超えて平和に暮らせる世界をめざすという彼の理想を聞き、「マンデラは共産主義者で危険なテロリスト」との“白人の常識”が揺らぎ始める。知的で穏やかなマンデラが獄中に届いた息子の“事故死”の電報に涙を堪える姿に思わず悔やみを言わずにいられない。そんなグレゴリーは周囲の白人たちから孤立し始める。いわれない制裁を受け、妻は脅迫電話に怯え、ついに最愛の息子が不可解な“事故死”を遂げる。職務に忠実であればあるほど、気高い理想への道の険しさを実感せざるを得ない。このまま体制内の安全圏に安住し続けるか？ いや、もはや「傍観者にはなりたくない。歴史の一こまになりたい」と願うグレゴリー。

無知による差別意識から崇高な思想に目覚め、自己改革していくグレゴリーの人間解放への道。それは、マンデラの「人間は自分で自分を変えることができる」との信念の証明であり、他人と違う意見や思想に向けられる社会の不寛容との闘いでもあった。2人はその意味では同じ道を歩んでいた。だが…。

今年90歳のマンデラは、間違いなく20～21世紀の偉大な人間像だ。悪名高いアパルトヘイト政策を廃止したが、白人への報復措置は一切禁止した。報復こそ戦争を泥沼化させるからだ。報復は地球上から消し去るべきとのマンデラの思想を至近距離から証明するかのような、時宜を得た映画と言えるだろう。

『マンデラの名もなき看守』

仏・独・ベルギー・南ア合作映画（117分）／ビレ・アウグスト監督

5月17日よりシネカノン有楽町他全国順次ロードショー

